



祐介の目

No.130

大田祐介 (福山市議会議員)

カルビーの元社長・松尾雅彦氏は農村の連合体による「スマート・テロワール」を提唱している。それは美しく強靱な農村自給圏であり、食料は地産地消、住宅用木材も地元産、電力もバイオマスや小水力により

テロワール

福山駅のコンコースに「兵庫テロワール」というパンフレットが大量に置いてあった。テロワールとは、その地域独自の気候風土を意味するフランス語であり、元々はワインの産地における栽培法等を示す用語であったが、解釈を広げて兵庫県全土が観光資源の宝庫のように表現してあった。ワイン専門用語がいつしか一般的な言葉になった。兵庫を含む瀬戸内沿岸は日照時間が長く降水量も少なく、特に私のワイナリーのある山野町は寒暖の差が大きいので良質なぶどうができる。

全国の農村が消滅の危機にあるが、市内から至近の距離にあり風光明媚な山野峡を有するテロワールを活かして、私は「山野峡ワイン」による活性化に取り組んでいる。実際に住民は減少しているが、町から週末だけ田畑に通う人は多いし、ワイナリーを訪れる人も徐々に増えている。

自給できる圏域を目指す構想だ。そもそも山野町には水力発電所があり、薪炭の産地であり、松茸や鮎やぶどうは名産として高値で売れた。まさにスマート・テロワールだった。松尾氏は口だけではなく、ポテトチップスの原料ジャガイモの生産農家2500戸と契約して全国各地の農村を守っている。私のワイナリーも末永く山野町を守る存在でありたい。

ロシアのウクライナ侵攻に端を発した小麦の不足や円安は日本の食糧輸入にも多大な影響を与えるだろう。輸入が無理なら自国で作るしかなく、重商主義から重農主義に転換せざるを得ない。重農主義、すなわち耕作放棄地を再生して米以外の穀物も生産し、山を切り開いて燃料を得た後を牧場とし、河川敷を市民に開放して家庭菜園にするなど、日本の農村を再生してスマート・テロワール化するチャンスと捉えるべきだろう。